

# 実践報告「英語での発話」を促すために（その2）

キーワード：コミュニケーション活動/協同学習/英語での発話

堀内 ちとせ

## 1. はじめに

東京オリンピック開催決定に伴い日本人の「英語能力の向上」が叫ばれる中、2020年度より、「英語教育」が、いよいよ、小学3年生から導入されることになる。世間では日本人の「英語能力(特に「英語を使う」力)」の向上に、ますます、意識が向けられている。ただ、長年、担当の学生たちを見ていると、今回の「英語熱」のずっと以前より、英語自体にはあまり興味がなくても、「英語を話す」ことには興味がある学生が意外に存在していた。学生の希望からみても、世の中のニーズからみても、「英語の授業」では、「英語を使える」ことに焦点を当てる必要があるのではないかと。

前回の試みでは、「文字情報」・「音声情報」をできる限り与えながら、少しでも授業で使える英語を増やす仕掛けをするとともに、授業内に「意味」と「英語の音声」を結び付けられるような練習を数多く行うことで、少しでも英語を使って表現できるような方向へと向かわせようとした(堀内, 2016)。

今回は、授業の中で学生たちが「英語を使える」活動として、「30秒 Talk」と「English Only Time」という2つの活動を採り入れてみた。

医療系大学の検査系のクラス、2015年度、前期、1学年、62名の「授業」の取り組みを中心に、同じく、検査系のクラス、2016年度、前期、1学年、64名の学生への「アンケート調査」をも併せて検討する。

## 2. 「今回の試み」について

### 2.0 「英語を使える活動」の導入

英語を話せる(使える)ようになるためには、英語の知識もさることながら、その知識を、とにかく「使う機会を持つ」ということが必要なのではないだろうか。語学は、「習う」より「慣れよ」である。毎週の授業の中で、学生たちが楽しく英語を「使う機会」を持てるように、今回の試みでは、「30秒 Talk」と「English Only Time」という、英語を話すための活動を2つ、導入してみた。今から「英語だ!」という意識を高めてもらうためにも、その2つの活動は主に授業の開始時に実施することにする。学生の様子を見て、「English Only Time」の活動の方は、授業の中盤もしくは最後に実施することにした。

## 2.1 「30秒 Talk」について

授業は、学生の授業への参加を少しでも促すために、「協同学習(小グループで互いに助け合いながら学習を進めていくグループ学習の1つ)」の考え方にに基づき、3人、あるいは4人の小グループを中心に展開させている。学生たちの毎時間のTalkを1分ではなく30秒にしたのは、この「30秒 Talk」の活動は、メンバーのそれぞれが英語で話して終わりといった単純な活動ではないからである。

「30秒Talk」には、「Word Counter」シート(資料1参照)を使用する。「30秒Talk」を始めるに当たり、まずグループで最初にTalkを行う学生(以降、Talkを進める順に、①番ちゃん、②番ちゃん、③番ちゃん、④番ちゃんとする)、および、Talkを回す方向を決める。①番ちゃんがTalkをしている間は②番ちゃんが「Word Counter」シートを使って語数をカウントし、②番ちゃんの時は③番ちゃんといった具合に、「Word Counter」シートの方も回していく。それぞれのメンバーのTalkが終わるごとに、チーム全体(クラス全体)で大きく拍手をして、Talkを終えたばかりのメンバーの頑張りを労う。

メンバー全員がTalkを終えたところで、タイマーで1分～1分半程時間を取って、Talkで語った内容の紙面上への書き出しを行う。その後、時間が許せば、チーム以外のメンバーの「30秒Talk」の書き出しを見せ合いお互いに表現を少しでも増やせるようにする。ここまでの活動全てを実行すると、15分間は必要になる。

## 2.2 「English Only Time」について

「English Only Time」は、2016年度の授業まで継続して行ってきた「連想ゲーム(コミュニケーション型)」(堀内, 2014)を発展させた活動である。まず、「30秒Talk」で決めた①番ちゃんが何か一言英語で語る。それは、英単語1語だけでも、1フレーズでも、1文でも良い。それを受けて、次に②番ちゃんが、それに関連した内容(単語でもフレーズでも、文でも)を、同じく英語でつなげ、③番ちゃん、④番ちゃんと同じように回していく。その後は、④番ちゃんの発話を受けて、今度は①番ちゃんが英語でつなぎ、同様に発話者を回しながら、合図のあるまで、原則、英語のみで発話リレーを続けていく。

①番ちゃんから④番ちゃんまで1語ずつ、あるいは1フレーズずつ言い合い、皆で1文を仕上げていくこともできる。誰かが質問をしてそれに答えていたり、昔話などを英語で語っていたり、メンバーで新しくお話を作っていくこともできる。皆で回しながら、全体で2分間、慣れてきているようであれば、3分間、タイマーで計って実施する。

### 2.3 「My Own Expression」シートについて

「30秒Talk」は授業前に準備して臨むこともできるが、「English Only Time」の方は、その場で、即、英語で表現することが必要となる。「英語」がすぐ出て来なくて黙ってしまえば、そこで活動が終わってしまう。そこで、「英語」が出てこない場合は、「英語にならない」部分のみ「日本語」を使ってもOKという特例を設けた。ただ、その「英語にならない表現」をそのまま放っておいてしまえば、せっかくの「英語を使う」ための活動も、ただのゲームと化してしまう。そこで、思いついたのがこの「My Own Expression」シートである。

「My Own Expression」シートには、「Words(資料2参照)」、「Phrases(資料3参照)」と「Sentences(資料4参照)」の3種類があり、学生には、「30秒Talk」等の英語を語る活動の前に、予め3種類のシートを渡しておく。「My Own Expression」シートには、自分が言いたかったのに言えなかった表現を、「日本語」と「英語」の両方で書き出せるような形になっている。言いたかった表現の長さにより、臨機応変に3種類のシートを使い分けることになる。「単語」、「句」レベルであれば、ネット上の辞書等を使って、比較的簡単に「日本語」を「英語」にすることもできるが、「文」レベルでは、難しい場合も出て来る可能性がある。その場合は、辞書の例文(自分が英語で言いたい文に近いもの)やネット上の情報を利用して、自分なりに英語にしてみるように声をかけた。シートがなくなり次第、新しいシートを個々に次々渡していくことにする。

「文」レベルの表現を英語にするに当たって、「多言語翻訳音声アプリVoiceTra」の紹介も授業内に行った。これは、NHKの「ニュースで英会話」(NHK eテレ「ニュースで英会話」<https://cgi2.nhk.or.jp/e-news/index.cgi> 4/27(木) 23:25~23:50 放送)で紹介されていたものである。「英語の授業で翻訳アプリ?」との意見を頂戴するかもしれないのだが、これも、将来、学生自身が自分で英語表現を増やしていくことができるようになるための練習だと割り切った。

「My Own Expression」シートはそもそも、「English Only Time」のために考え出したものであった。ところが、「30秒Talk」の時でも、前もって語る内容を準備してくる余裕がなかったのか、「日本語」を多用している学生が見られた。そこで、「30秒Talk」時であっても、あるいは、その他の授業内の活動時であっても、「英語」が出てこないで「日本語」になってしまった場合などは全て、「My Own Expression」シートを利用するように呼びかけた。

また、シートにバイリンガル形式で言えなかった表現を書き出すだけでは、「知識だけ」を得て「実際に使う」練習をしないままに終わってしまう。シートに書き出した表現は、極力、「使ってみる」努力をするようにも呼びかけた。

さらに、先回の試みと同様、授業外の活動としては、今回も「実体験レポート(堀内, 2013)」に取り組みせ、授業内外を問わず、聞こえた英語は、ことごとく自主的に「つぶやく」努力をするように声かけも続けた。教員の方でも下手ながら、間違っても楽しく英語を使い、前回と同様、学生たちにも「(日本人なのだから)間違っても大丈夫!」と訴えかけ続けたことは言うまでもない。

### 3. 結果と考察

#### 3.0 「アンケート」について

最後の授業時に、対象学生全員にアンケート調査を行った。アンケートの尺度は、安永(2012:125)に倣って「1・2・3・4・5」の5段階とし、「1」は「全くそう思わない」、「5」は「とてもそう思う」とした。また、可能な場合にはコメント等も記述してもらった。

2017年度前期の試みで、「英語での発話」について調査したのは、「英語が口から出やすくなった」かどうかという1項目についてである。2016年度、前期の学生たち(1学年)に対しても、授業の最終時に同じ質問項目で調査したデータがあるため、今回の2017年度、前期の学生たち(1学年)の試み後の結果と比較してみることにする。

前回の試みでは、授業内の活動時に使えるような表現の文字情報を示し、それに対応する音声情報もできる限り与えながら、授業の中では、英語の文字と音声を結びつけることに焦点を当てた活動を数多く行い、授業内での「英語の発話」を少しでも増やそうとした。その結果、授業内に「英語を使う機会が増えた」という結果を得ることができた(堀内, 2016)。

今回の試みでは、授業内に、学生たち自身が自ら英語を話すような活動を2種類(「30秒Talk」・「English Only Time」)採り入れ、型にはまった英語だけではなく、自分が語りたい内容を少しでも自らの口で語れるような方向に向かわせようとした。授業内の「お決まり」の表現にこだわらず、学生自身が語ろうとする様々な英語表現を実際に使う場を設けることにより、少しでも実際に英語を話す(使う)ことに「慣れてきた」と答える学生の増加を期待したい。

今回は、「英語を話す」ための2つの活動、「30秒Talk」や「English Only Time」の実施に加え、活動後には、「My Own Expression」シートも導入してみた。担当クラスは60人以上の大人数であり、学生一人ひとりの表現に対してアドバイスを与えるなどの、質的なフィードバックを行うことが難しい。「My Own Expression」シート導入の主旨には、英語の授業が終わった後も、さらに、大学卒業後も自分自身で必要な英語表現を増やしつつ、英語表現力を向上させていくための練習の意味も込められている。

「My Own Expression」シートおよび「多言語翻訳音声アプリVoiceTra」についても、5段階のアンケートで、使用状況、活用状況などを調査した。日常的に英語を使う機会がほとんどない中、せめて、授業内だけでも、1人でも多くの学生がシートやソフト等を利用しながら、さらに、確認した表現を実際に活用できていることを確認できたらと思う。ただ、「VoiceTra」については、授業内だけに限らず、授業外も是非、活用してほしいという教員の希望もあるため、「『多言語翻訳音声アプリVoiceTra』を使用している」といったアンケート項目として調査した。

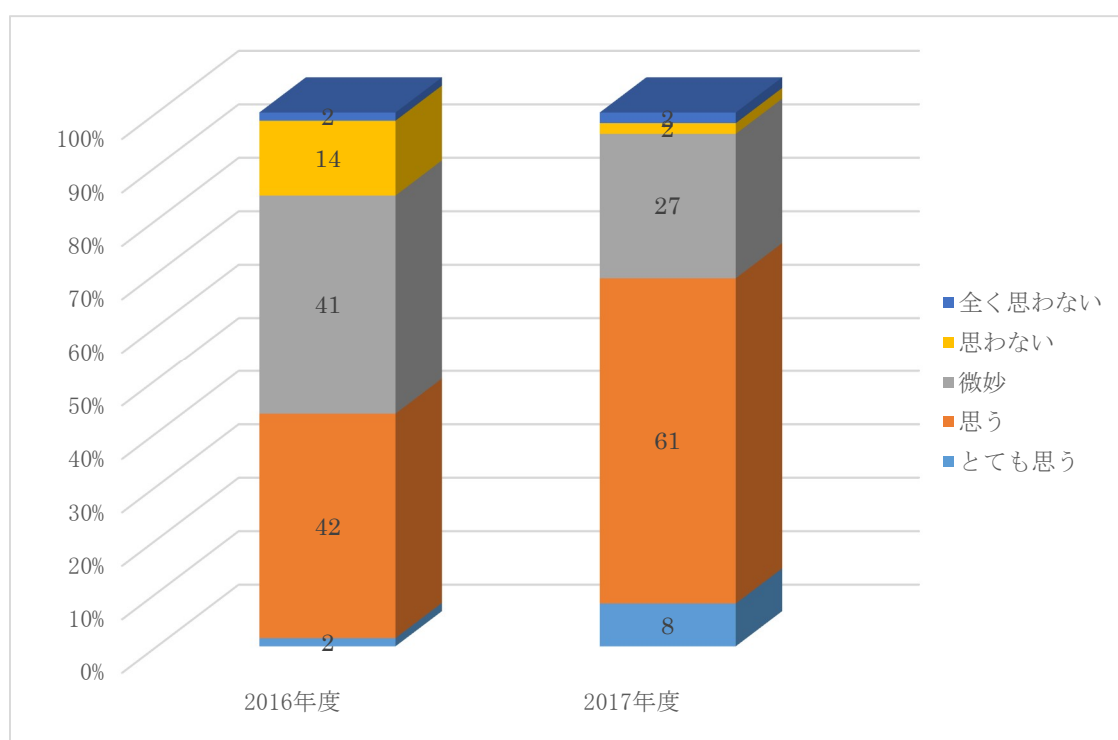
最後に、英語の授業が終わっても、「英語に触れていけそう」かどうかについても、調査を行った。学生の性格や置かれている状況など、授業以外の要因も大きいとは思われるが、この項目に関しても、2016年度前期、および、2017年度後期についての結果を比較してみたい。仲間との「30秒Talk」・「English Only Time」の活動に楽しく参加でき、授業後も「英語と触れていけそう」と答える

学生が少しでも増えていることにも期待したい。

### 3.1 「英語での発話」について

「英語が口から出やすくなってきた」かどうかについて、2016年度、前期、1学年の学生、64名と、2017年度、前期、同じく1学年、62名の調査結果を比べてみることにする。

図1 「英語が口から出やすくなってきた」(2016年度 vs. 2017年度)



Note. 「英語が口から出やすくなってきた」という項目に対する、2016年度(左側)と2017年度(右側)の調査結果。縦軸は、下より「とても思う」・「思う」・「どちらでもない」・「思わない」・「全く思わない」と答えた学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図1において、2017年度における「とても思う」・「思う」と答えている学生の割合をしてみると、2016年度の割合よりも増えていることが一目瞭然で分かる(それぞれ、2%+42%=44%、8%+61%=69%)。2016年度と2017年度の平均値の差を優位水準1%の両側検定により検討してみると、有意差が見られた( $t(124) = 3.72, p < .01$ )。

学生からのコメントを見てみると、「単語しか出てこない」といったマイナスのコメントも見られたが、ほとんどの学生からは、「英語を身近に感じられるようになった」など、前向きなコメントが数多く見られた。前向きなコメントには、「授業で、英語でたくさん喋った」といったものから、「英語で話すのが

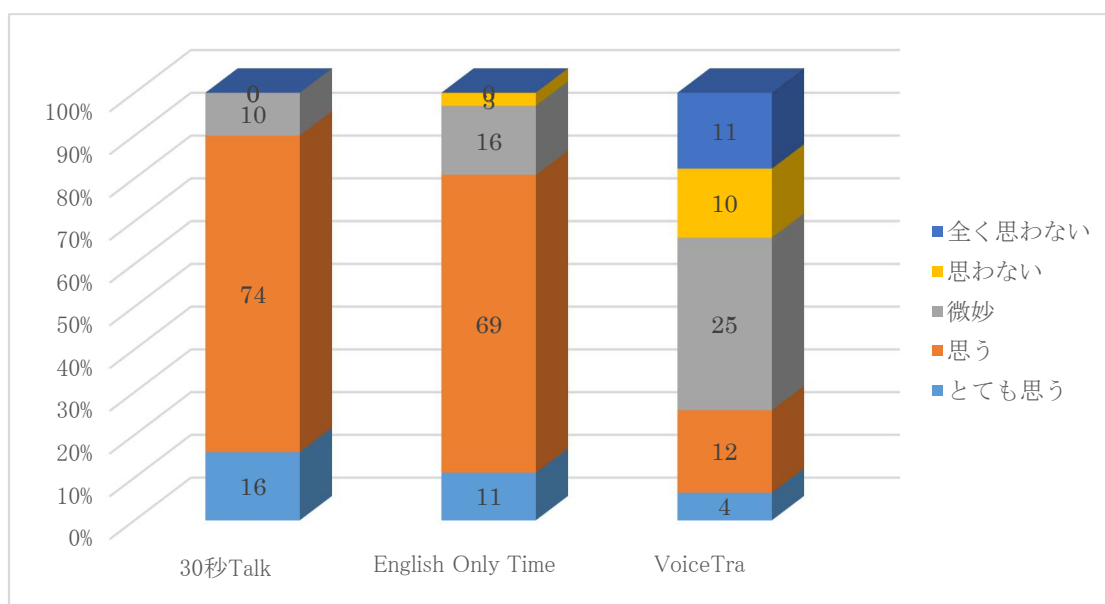
楽しくなった」・「楽しくできるようになった」といったもの、さらには、「英語を使えるように意識した」・「何か話そうと心がけるようになった」といったものまで、様々なものが見られた。

また、「カタコトの英語でも話してみることが大事だと思うようになった」・「間違ってもいいから話そうと思えた」といったコメントも見られた。「完璧でなくてもやってみよう(話してみよう)」といった気持ちが芽生え始めている学生が見られたことは見逃せない。間違いなどを気にしていたのでは、次のステップに進むチャンスも逃してしまう。一番、大切なポイントに気づけた学生が出たのは喜ばしいと言えないか。

### 3.2 「My Own Expression」シート・「VoiceTra」について

授業内の活動、「30秒Talk」や「English Only Time」の活動後に、「『My Own Expression』シートを利用できた」、および「『自動翻訳音声アプリ VoiceTra』を使用している」という項目に対して、「30秒Talk」・「English Only Time」・「VoiceTra」、それぞれについて、1つのグラフにしてみると次のようになった。

図2 「『My Own Expression』シート・「VoiceTra」の利用について



Note. 「『My Own Expression』シートを利用できた」という項目における、「30秒Talk(左側)」と「English Only Time(中央)」における調査結果、および、「『自動翻訳音声アプリ VoiceTra』を使用している」(右側)という項目における調査結果(右側)。縦軸は、下より「とても思う」・「思う」・「微妙」・「思わない」・「全く思わない」と答えた学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図2において、「30秒Talk」と「English Only Time」における「とても思う」・「思う」と答えている学

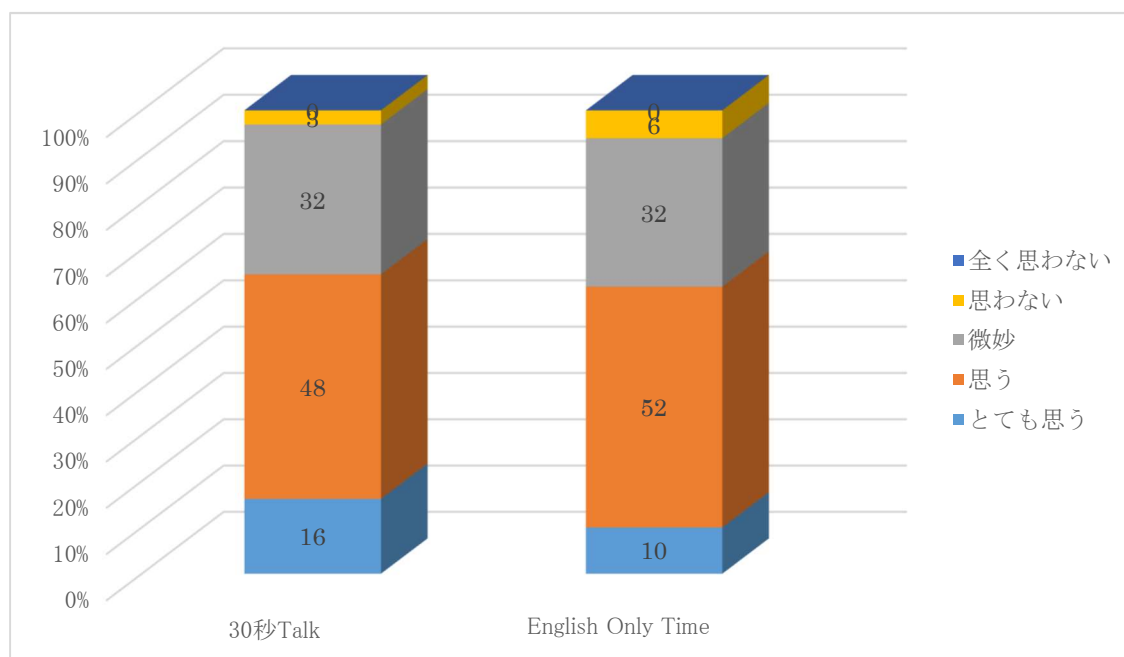
生の割合を見てみると、どちらの場合も80%以上の学生が「活動時に英語で言えなかった英語表現に対して、『My Own Expression』シートを利用して英語にできた」と答えている(それぞれ、 $16\% + 74\% = 90\%$ 、 $11\% + 69\% = 80\%$ )。一方、「VoiceTra」については、「翻訳ソフトを使って解明できた」といったコメントが1件見られたものの、「とても思う」・「思う」と答えている学生の割合は、全体の学生の5分の1にも達していない( $4\% + 12\% = 16\%$ )。

「My Own Expression」シートの方は、「30秒Talk」・「English Only Time」の活動前に配布し、チームメンバーとの「英語での語り」が終わるごとに、「英語にできなかった表現」をシートに書き出し、辞書等を用いてバイリンガル形式にするよう声かけした。それに対して、「VoiceTra」の方は、学生たちの前で実際に使って見せることはしたものの、Wi-Fiの接続の問題もあり、授業内にアプリをダウンロードさせることができなかった。授業後、翻訳ソフトのアプリをスマートフォンに入れるためには、自らの意思で動かさなければならない。アプリのインストールが次の授業までに完了できていないと、授業内に「翻訳アプリ」を使いたいと思っても、使えないことになってしまう。辞書の準備もさることながら、使いたいデバイス関係も、すぐ使える状態でスタンバイしておくことということが大切と言えるのかもしれない。

### 3.3 「英語表現」の活用について

『My Own Expression』シートを利用して確認できた英語表現を実際に使えた」という項目に対して、「30秒Talk」「English Only Time」それぞれについて、1つのグラフにしてみると次のようになった。

図3 「確認できた英語表現」の活用について



Note. 『My Own Expression』シートで英語にできた表現を実際に使えた」という項目における、「30秒Talk(左側)」と「English Only Time(右側)」における調査結果。縦軸は、下より「とても思う」・「思う」・「微妙」・「思わない」・「全く思わない」と答えた学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図3において、「30秒Talk」と「English Only Time」における「とても思う」・「思う」と答えている学生の割合は、どちらも過半数を少し超える(それぞれ、 $16\% + 48\% = 64\%$ 、 $10\% + 52\% = 62\%$ )。これを、図2のシートの「利用」と比較してみると、およそ30%前後の違いが見られる。活動後に「表現の確認」ができたとしても、実際に使用に至るのは、確認する以上に難しいと言えるのかもしれない。「調べてもずっと言えない」・「次に表現できることが少なかった」といったコメントも見られた。

「(確認したものが)あまり実際に使える表現や単語ではなかった」・「なかなか使える状況がなかった」といったコメントが見られた。これは、特に「English Only Time」の方に多く見られたが、「English Only Time」では、仮定の話や昔話など、現実とはかけ離れているような内容のものを英語で言い合うといったことが、授業の後半に流行り始めていたためかもしれない。

一般的に、分からない(言えない)英語を確認することよりも、確認した英語を実際に使うことの方が難しそうである。「確認」は単に「確認」さえすれば良いのだが、実際に「使う(言える)」となると、

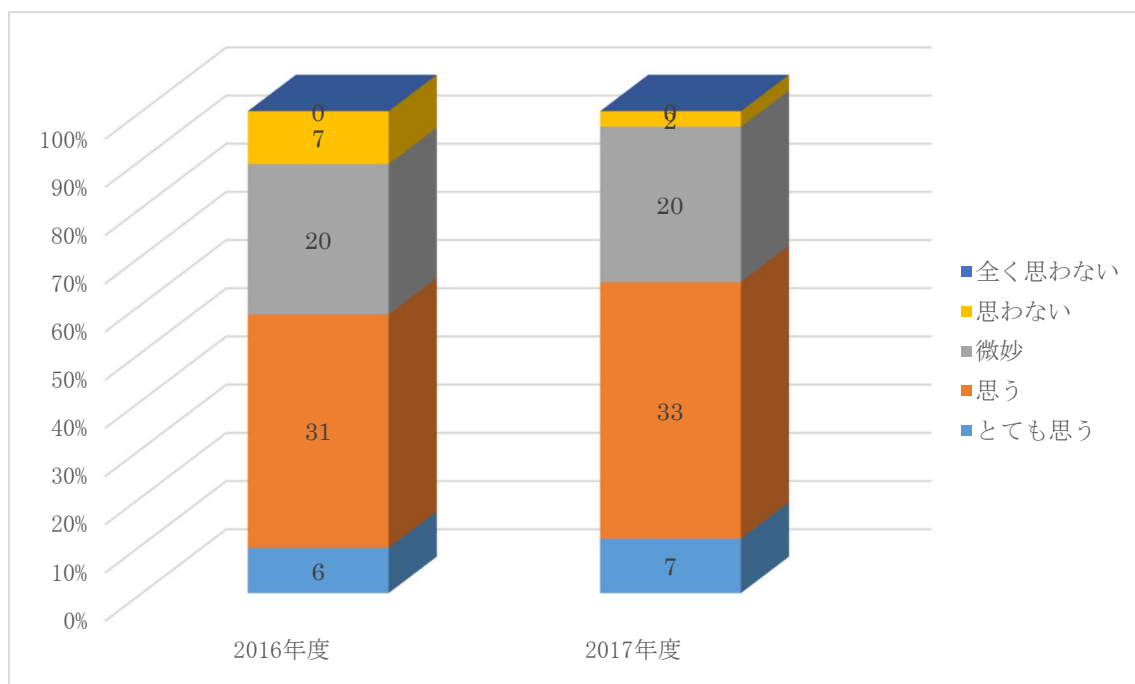


表現を記憶して言える状態にまでになっている必要がある。ましてや、使えるような機会がなければ、なおさらである。そんな中で、「調べる力が身についた」・「自分から調べるから頭に残りやすい」・「分からないことがはっきりすると覚えられる」といったコメントも見られた。実際、人から言われて「調べさせられた表現」よりも、「自分が分からなくて調べた表現」の方が、覚えようという気にもなるだろうし、記憶にも残りやすいのではないだろうか。この「My Own Expression」シートは、必要な表現を自ら増やしていくための手段としての機能を果たしてくれるものだと言えるかもしれない。

### 3.4 授業後の「英語活動」について

最後に、英語の授業が終わった後も、「英語に触れていけそう」かどうかについて、2016年度と、2017年度の調査結果を比べてみることにする。

図4 「英語に触れていけそう」(2016年度 vs. 2017年度)



Note. 「英語に触れていけそう」という項目における、2016年度(左側)と2017年度(右側)の調査結果。縦軸は、下より「とても思う」・「思う」・「微妙」・「思わない」・「全く思わない」と答えた学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図4を見ると、2017年度の結果の方が、ほんの僅か、2016年度よりも「とても思う」・「思う」と答えている学生の割合が多いことが分かる(それぞれ、6%+31%=37%、7%+33%=40%)。2016年度と2017年度の平均値の差を優位水準5%の両側検定により検討してみたところ、有意差が見られなかった( $t(124) = 1.26, n.s.$ )。

3.1で見たように「英語が口から出やすくなってきた」と答えている学生を比較する際は、明確な差が見られた。が、それが、学生たちに、授業が終わった後も「英語に触れていけそう」ということにはまではつながらないようである。

コメントを見てみると「なかなか触れる機会がなさそう」・「あまり触れる機会が無さそうだから」といったものが見られた。気持ちはあっても、英語に触れられるような機会は自分で作らない限り、なかなか難しいのが現実ということなのかもしれない。

今年度も、授業が実施されている間だけでも、学生たちが毎日、英語に触れられるようにと、授業外での「英語活動」に取り組ませていたのだが(堀内, 2013)、「英語が苦手だけど宿題のやつ(「授業外の英語活動」のこと)とかは続けられそう」・「ジャーナル(「授業外の英語活動」のこと)的な感じで」などのように、「英語活動」的な形でということだったら、英語に触れていけそうだとコメントしている学生が何人か見られた。

学生自身が目標を定め、日々取り組んでいる「英語活動」の内容に、「英語を話す」という内容が、もっと盛り込まれるようになると、学生たちの口から英語が出始めるのも、実現できるのかもしれない。

#### 4. おわりに

前回の試みでは、英語の音声と文字を結びつけるような練習を数多く行いながら、授業内に「英語を使う(話す)」機会を増やしつつ、学生たちが少しでも英語を口から出しやすいような方向へと向かわせてみた(堀内, 2016)。今回は、前回の試みを更に膨らませる形での実施である。具体的には、「30秒Talk」・「English Only Time」という、基本的に英語のみを使う活動を授業内に行う活動として採り入れてみた。

「英語を使う」活動を授業の中に採り入れるだけでは、「英語で言えなかった表現」が出た場合、その問題となった表現をそのまま葬り去ることになってしまう。しかし、その「英語にならなかった表現」こそ、自分自身にとっては学ぶところの多い絶好の勉強材料とは言えないか。そこで、今回は、自分が英語にできなかった表現をバイリンガルの形(日本語と英語の内容が載っている形)で、まとめられるようなシートも併用させながら「英語を使う」活動を授業内に実施してみた。

授業内に「英語を使える」活動を実施することにより、「英語が口から出やすくなってきた」という学生の割合を大きく伸ばすことができた。また、シートを導入することにより、「言えなかった英語表現」の確認にも、多くの学生たちに取り組んでもらうことができた。ただ、残念ながら、ここで確認できた英語表現を、「実際に使う」というところまで実行できた学生の数は、過半数にとどまった。

人間、必要に迫られると、できなかったことができるようになるものなのかもしれない。であったとしても、「必要に迫られる」前に、少しでも「英語を話す(使う)」トレーニングを積んでおくことは、足しにこそなれ、決して邪魔になるものでもないのではないか。

これからも、学生たちの意見にも耳を傾け、学生たちと一緒に授業を作り上げていきながら、少しでも学生たちの「英語を使う」手助けをし続けていけたらと思う。

## 参考文献

- 協同学習法ワークショップ<Basic> 2009年改訂版 日本協同教育学会.
- 堀内ちとせ(2013)「英語の日常化を図るために―「英語活動・実体験レポート」の試みについて―」*Language & Literature (Japan)* 第22号 82-94. 愛知淑徳大学大学院英文学会.
- \_\_\_\_\_(2014)「英語の瞬発力を上げるために」*Language & Literature (Japan)* 第23号 14-21. 愛知淑徳大学大学院英文学会.
- \_\_\_\_\_(2016)「英語での発話を促すために」*Language & Literature (Japan)* 第25号 50-64. 愛知淑徳大学大学院英文学会.
- 安永悟(2012)『活動性を高める授業づくり―協同学習のすすめ―』医学書院.

参考資料

資料 1

WORD COUNTER SHEET							
1	40 ⇒ 41	80 ⇒ 81	120 ⇒ 121	160			
2	39	42	79	82	119	122	159
3	38	43	78	83	118	123	158
4	37	44	77	84	117	124	157
5	36	45	76	85	116	125	156
6	35	46	75	86	115	126	155
7	34	47	74	87	114	127	154
8	33	48	73	88	113	128	153
9	32	49	72	89	112	129	152
10	31	50	71	90	111	130	151
11	30	51	70	91	110	131	150
12	29	52	69	92	109	132	149
13	28	53	68	93	108	133	148
14	27	54	67	94	107	134	147
15	26	55	66	95	106	135	146
16	25	56	65	96	105	136	145
17	24	57	64	97	104	137	144
18	23	58	63	98	103	138	143
19	22	59	62	99	102	139	142
20 ⇒ 21	60 ⇒ 61	100 ⇒ 101	140 ⇒ 141				

資料2

**My own Expressions (Words)**

No. \_\_\_\_\_

\*Stu. No. 下2桁 or 下3桁(

) \*Nickname 二+72-6(

Self-rating (Circle the number)

→ 1・2・3・4・5

1 .....	2 .....	3 .....	4 .....
5 .....	6 .....	7 .....	8 .....
9 .....	10 .....	11 .....	12 .....
13 .....	14 .....	15 .....	16 .....
17 .....	18 .....	19 .....	20 .....
21 .....	22 .....	23 .....	24 .....
25 .....	26 .....	27 .....	28 .....
29 .....	30 .....	31 .....	32 .....
33 .....	34 .....	35 .....	36 .....
37 .....	38 .....	39 .....	40 .....
41 .....	42 .....	43 .....	44 .....

資料3

**My own Expressions (Phrases)**

No. \_\_\_\_\_

\*Stu. No. 下2桁 or 下3桁(

) \*Nickname 二・72-6(

Self-rating (Circle the number)  
→ 1・2・3・4・5

1 .....	2 .....
3 .....	4 .....
5 .....	6 .....
7 .....	8 .....
9 .....	10 .....
11 .....	12 .....
13 .....	14 .....
15 .....	16 .....
17 .....	18 .....
19 .....	20 .....
21 .....	22 .....

資料4

★Stu. No. 12345 ( )★Nickname ニャー ( )★自分の得意種★Self Rating (Circle the Number)

★★★My Own Expressions★★★ No. \_\_\_\_\_

	日本語 (英語で言いたかった表現)	英語 (辞書の例文やネットの資料 etc を参考に)
1		⇒ 1-2-3-4-5
2		⇒ 1-2-3-4-5
3		⇒ 1-2-3-4-5
4		⇒ 1-2-3-4-5
5		⇒ 1-2-3-4-5
6		⇒ 1-2-3-4-5
7		⇒ 1-2-3-4-5
8		⇒ 1-2-3-4-5
9		⇒ 1-2-3-4-5
10		⇒ 1-2-3-4-5
11		⇒ 1-2-3-4-5
12		⇒ 1-2-3-4-5